

---

# 君の傍にいる

影御津

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君の傍にいる

### 【Nコード】

N2152C

### 【作者名】

影御津

### 【あらすじ】

高校生探偵であった工藤新一が江戸川コナンになって二年が経ち、人間関係は大きな転換期を迎えていた。コナンは大切な少女と、共にあるために奔走して行く。

## FILE0:プロローグ(前書き)

この物語は「哀」です。

## FILE 0：プロローグ

オレは今、灰原哀と付き合っている。

何時からだろうか…アイツを意識するようになったのは。

気が付くとアイツを目で追っている自分がいた。

アイツの傍に居たいと思う自分がいた。

そう…オレは何時の間にか灰原哀を愛していたんだ。

思えば蘭の事は異性というよりも、弟や妹などに接する兄のような思いであった事が、今だからこそ判る。

現在、オレが毒によって小さくなってから、もうすぐで二年になる。黒の組織こそ壊滅させたものの、アポトキシンAPT X 4 8 6 9のデータ及び、現物はジンによって処分されてしまった為に、完全な解毒剤は作れなくなってしまった。

灰原は泣いた。仮に完全な解毒剤が作れたとしても、何時になるか分からないと…

その間に置ける工藤新一というオレの時間を奪ってしまったと、慟哭している灰原に対してオレは愛しさを感じていた。

この時オレは、コイツは誰かが傍に付いていてやらないと絶対に幸せに為ろうとしないんじゃないか？

オレが決してオマエのせいで幸せになれないなんて事は無いと、そう教えないといけないと駄目だと思った時、オレは灰原に有りのままの思いを伝えていた。

「灰原：確かにオレは、オマエの作った毒薬で小さくなった。でもな、だからこそ今のオレがここにいるんだ」

「でもそれは…」

オレは灰原に反論される前に遮った。

「本当なら、オレはあの時死んでいてもおかしくなかった。もし、毒薬があの時無かったら銃で撃ち殺されたりしてたかも……」

「……………」

灰原はオレの言葉を黙って聞いている。

「だからな……灰原が気にする必要はないんだぜ」

「……工藤……君……わたし……」

オレはボロボロと涙を流す灰原を抱き締めた。

「オレは灰原を幸せにしてやりたい。ずっとオレの傍にいてくれな  
いか？」

「……わたしを？……本当に？」

灰原はオレに抱き締められながら問い掛けて来る。

「マジだ。灰原の事が好きだからな」

「わたしは幸せを求めてもいいの？わたしは工藤君の傍にいてもいいのね？」

オレは当然の事のように答を返す。

「あつたりめーだろ。オレが認めてんだぜ。仮に誰に何と言われようがオレが許してんだからよ」

「工藤君、わたしも貴方の事が好き。ずっと貴方の傍に居させて」  
オレはそつと灰原の髪を梳いた後、顔を引き寄せキスをした。

「工藤君……」

「灰原……」

これが一カ月前の事であり、灰原と付き合う切っ掛けになったこと。オレが完全に工藤新一という人生を捨て、江戸川コナンとしての人生を生きていく事を決断した日だ。

これからいろんな事があるだろうが、オレは灰原と一緒になら楽しくやっていけるだろう。

## FILE0：プロローグ（後書き）

どうも、初めまして。

影御津です。

わたしは完全な素人であり、これが初めての作品です。

文法が変わったり、更新が遅かったりするかもしれませんが、完結はさせますので、

気付いた事があれば言っていたらけると助かります。

**FILE 1：明日の為に出来る事とは？（前書き）**

今回は、哀を選んだ事により直面する問題の話です。

## FILE 1：明日の為に出来る事とは？

「そういえば、工藤君は蘭さんの事、どう対応する気なの？」

阿笠邸のリビングで、コーヒーを飲みながら寛いでいた灰原は、同じく推理小説を読んで寛いでいたオレに蘭の事について訊いてきた。「ああ、それなんだけどな。どうすりゃいいかこの一カ月の間、オレなりに考えたりしてみたんだけどよ。未だにどうすりゃいいか判かんねえんだよ」

オレは、幾通りかの考えがあつたが、どれにしても心情的に納得しにくいものばかりだった。

「…そう。どうすればいいか判らないという事は、貴方なりに幾つかのプランがあるという事でしょう？」

良ければ、わたしにも教えてくれないかしら？

力になれるかもしれないし。蘭さんの事については、わたしにも責任が無いとはいえないもの」

灰原はそう言ってきたが、灰原には責任など無い筈だ。

「別に、オマエに責任があるとは思ってねえぞ」

オレはそう言ったが、

「そんな事はないわ。少なくとも、蘭さんから貴方を奪った事については変わらないもの」

そんなモノか？

…いや、少なくともそうなんだろう。

オレだって、蘭を二年近くも待たせていた挙げ句の果てに、オレは灰原を選んだんだ。

「…それは、オレにも責任があんだよ。だから、オマエも気に病むんじゃないねえぞ？」

灰原は微笑みながら

「ええ、…わたしたち二人の罪って事ね？」

オレも笑みを返しながら



「ああ、その通りさ」  
そう言った。

「そういえば、今後の事について話してたんだよな？」

話が横道に逸れてしまったが、こっちの方が本題だったんだ。

「そうだったわね」

オレたちは苦笑した。

「まあ、何ていうかさ…こうすればいいってのはあるんだけどよ」

「…例えば？」

灰原はオレの言葉を促した。

「…取り敢えず思いついたことは

一つ目、工藤新一を死んだ事にする事。

二つ目、工藤新一を行方不明扱いにする事。

三つ目、工藤新一は戻らないと蘭に伝える事。

四つ目、思い切って正体を明かす。

…の四つだな」

…これらの事を思い付いたが、それぞれメリット、デメリットがあった。

「…そうね。一つ目は、工藤君が死んだ事になるわけだから、後の事については蘭さんの心情的な問題くらい。

…でも、死んだということにするのであれば、まずは工藤君の両親に相談しなければならぬ。

そして、最大の問題は遺体の方ね。幾らなんでも、工藤君の幼馴染である蘭さんに黙って、もう遺体は処分した。

…なんていうのは不自然なもの。遺体のない通夜や葬式なんて殆どないわ。

…相当悲惨な殺され方をした

…なんて、思われかねないわね」

オレの考えと灰原の言った事は殆ど変わらないが、言いくい事を

ハッキリと言い切るあたりは、灰原らしいといえた。

「それにオレと蘭の関係上、それらの事に呼ばれないなんて事はありえない」

そう…自他共に認めている親しい人間の葬式に呼ばれないのは、あまりにも不自然なのだ。

「ええ、それと二つ目の案である行方不明扱いは、後が問題になる可能性があるわ」

「一つ目の案の問題は解消できるが、行方不明という事で、しばらく周りに心配を掛け続ける事。」

それに蘭がオレに縛られたままになる可能性が高いつて事だな」

喋り続けて喉が渴いたオレは

「灰原、ワリイけどオレにもコーヒー貰えねえか？」  
と言った。

「…コーヒーね？ブラックでいいの？」

灰原はカップを手に取り、コーヒーメーカーからコーヒーを注いでいる。

「ああ、ブラックで構わないさ」

灰原は入れ終わったコーヒーを持ってきながら、先程の話を振ってくる。

「工藤君、わたしは三つ目の案が一番いいと思うわよ？」

オレはコーヒーを受け取りながら

「やっぱ、灰原もそう思うか？」

そう言った後、コーヒーで喉を潤す。

「ええ、先ず一つ目と二つ目の案の問題点はなくなるわね。そして蘭さんが、後を引きずる可能性は最も引い。

…唯一つ、問題といえるとは思わないけど。工藤君は、完全な悪役になるって事だけは確かよ」

灰原はニヤリと笑いながら言う。

オレが悪役になる事は、理解していたけどよあ。

「…ハッキリ言うなよな。オレだって、そのぐれーは理解してんだ」

「…事実でしょ」

「またもニヤリ笑いする灰原。」

「…そうだよ。灰原はこういうヤツだったよ。」

「まあな、だけど問題はもう一つあるぜ」

「灰原は一呼吸置いてから」

「…蘭さんが簡単に、引くかどうかは判らない」

「…そうでしょ？」

「と、言外に問い掛ける。」

「…そうなんだよなあ。蘭のヤツは、あれで頑固な所があるからな。」

「素直に聞いてくれるかどうか、分かんねえんだよなあ」

「二年近く待たせて、サヨナラじゃあなあ。」

「…普通、簡単に納得しねえよな…」

「…最悪、無理矢理押し切るしかねえのかな…」

「…無理矢理押し切るって？」

「灰原はその意味を推測しながらも聞いてくる。」

「…オレは今、大切な娘がいるんだって一方的に伝えて、工藤新一」

「のいない人生を生きろって言うのさ」

「…それで納得してもしなくても、無理矢理終わらせるのね？」

「灰原はそれが、どういう意味か判っているの？」

「…顔をしている。」

「…ああ、オレを最悪の極悪人にするんだよ」

「…ハア、貴方って本当にお人好しよね。」

「…まあ、そんな貴方を、わたしは好きになっただけけれど」

「仕方無いだろ。オレが悪いんだから。」

「…って、さり気にぶつちやけないでくれよ。」

「それはともかく、四つ目はあまり選びたくないな」

「…なんで、黙ってたか訊かれたくないから？」

「それとも、わたしの為？」

「灰原、なかなか答え難い発言だな。」

「…どっちかつつーと、灰原だよ。人つてーのは、責め易い方を責」

めるからな。

幾ら、オレが自業自得だからといっても、蘭が灰原の事を責めないなんて、思ってたねえんだよ」

「…わたしは、気にしないわよ」

灰原はこんなことを言っているが、出会った頃はともかく、今は絶対に気にするだろう。

「…強がるんじゃないよ。二人きりの時ぐれー、ちつとは素直になつてくれる方が嬉しいんだぜ。オレは」

「…何を言うのよ…」

灰原の顔が真っ赤になる。

目茶苦茶可愛いぞ！灰原！

「灰原あ、顔真っ赤だぜ」

「…っ!？」

固まった灰原を抱き寄せて、

「…可愛いぞ、灰原」

そつと囁く。

「…い…今は、真面目な話の途中でしょ…」

あまり、からかいすぎると、後が恐いので解放する。

「確かに、さっきのはオレが悪かったな」

「…全くよ」

灰原の顔はまだ赤味を帯びたままだ。

「まあ、さっきの話を纏めりゃー、三つ目の案が一番だつてところだろうな」

「…でしようね。それが一番無難よ」

今後、どうするかは決まった。

後は何時、決行するかだけだな…

「…で、工藤君は今、何を考えているのかしら？」

…灰原にも、訊いてみるか…

「…何時、蘭のヤツに伝えるかってな…灰原は、何時が一番いいと思うんだ？」

灰原は逡巡すると

「時期的には、蘭さんは、もうすぐ高校を卒業するわよね？」

確かに、蘭は進学が決定していて、後は卒業するだけの状態だ。

「…ってー事は、卒業式前後にするって事か？」

「…ええ、一番いいのは終わった後よ」

卒業式後か…

悪いな蘭、こんな事になったのは、オレの責任だ。

オレは灰原の傍にいと決めたんだ。

…だから、他のヤツと幸せになってくれ。

オレが言える義理じゃねえが…オレは、蘭にも幸せになってもらいてーんだからよ。

**FILE 1：明日の為に出来る事とは？（後書き）**

コナンが哀を選んだ場合…というか、元の姿に戻れなかったらどんな選択をするのだろうか？

というお話でした。

理屈っぽい事を並べ立てているので、くどかったかもしれませんが

…

**FILE 2：戸惑い・暴露・そして別れ（前書き）**

今回は少年探偵団の面々と蘭が初登場となります。

## FILE 2：戸惑い・暴露・そして別れ

今日は、蘭の卒業式の日だ。

…オレは蘭に別れを告げなければならぬ。本音を言うなら真実を伝えたいんだが、今のオレはとも言えそうにない。

もし…もし、真実を告げる時が来るのなら。

…お互いが笑って済ませられるのなら、どんなにいいのだろうか。そう思ってしまうのは、オレの愚かな思い上がりから来るモノなんだろうか？

授業を受けているオレは今日の事で頭がいっぱいだっただ。

「…はあ」

どうすっかなあ…流石に当日になってから躊躇するなんて思わなかったぞ。

昼休みになっても、頭を悩ませていたオレは屋上にいた。そんなオレを心配したのか灰原が話し掛けてきた。

「…江戸川君、だいぶ悩んでたみたいけど…」

「…ああ、やつぱ分かるか？」

ホント、オレはどうかしてるよな…灰原に心配かけちまうなんてよ。

「…ええ、授業中ずつと上の空だったもの」

「…何つつたらいいんだろうな。」

…今日やる事…についてなんだけどよ。」

流石に学校内でその話をするわけにはいかないもので、内容は伏せる。

「…そう…あの事ね？」

灰原はオレの言いたい事が分かったらしく。その事を理解した上で確認している。

「…本当に、オレは正しい事をしようとしてんのか？」

…自分にとって都合のいい選択を取ろうとしてんじゃないのか？



…実は逃げてるだけなんじゃねーのか？

…そう、思っちまうんだよ…」

…灰原はオレから視線を外して

「…正しいかどうかは分からないわ。

…自分達にとつて都合のいい選択をしているのかもしれない。

…本当に逃げているだけなのかもしれない…」

そう言った。

「…でも」

そう言った灰原はオレに視線を戻し

「…だからといって辞めるわけにはいかないわ」

オレをしつかりと見て

「…もし、何もしなかったら。

…本当に逃げたことになってしまいうから

…そう…だよな。

「…灰原は、強いな」

本当にそう思う。

「…別に、わたしは強くなんてないわよ。

…もし、そう見えたなら」

灰原は笑みを浮かべて

「…それは、貴方がいるからよ」

そう言った灰原の笑顔は、とても綺麗だった。

「分かった。もうオレは逃げない。

オレはオレの、為すべき事をすればいいんだよな？」

「…ええ、それに貴方は独りじゃないわ。

…わたしが傍にいるもの」

そうだった…オレは独りじゃないんだ…

…それに、これはオレ達の為だけじゃない。

いいのかわりいのか分からねーけど、これは蘭の為でもあるんだ。

決意を新たにしたオレは少年探偵団のヤツラと一緒に下校していた。  
「コナン君、随分スッキリした顔をしていますけど何かあったんですか？」

光彦、なんでわかんた！？

「江戸川君、顔に出てたわよ……」

か、顔に出てたのか！？

「な……なんでもねえよ……！」

「おい、コナン。そんなにどもつてたらバレバレだぞ」

げっ、元太に突っ込まれるとは！

「あ……コナン君、歩美達に隠し事するなんてひどいよ」

ああ、歩美い。これ以上、突つかないでくれよ！

「……これは、話さないと皆が離してくれないんじゃないかしら？」  
は、灰原！？

なんで余計な事を言うんだ……！

「……何〜（んでですか）（んで〜）！？」

「……コナン（君）〜」

「……なんで、哀ちゃん知ってるのに、歩美達には教えてくれないの……！」

「そうです……！……っていうか、なんで灰原さんだけには教えてるんですか……！」

「そうだ……！……そうだ……！」

って、三人で捲し立てるな……！

「なんで、オマエらそんな知りたがんだよ……！」

「……知りたいからに決まってるんだろ（いるでしょう）（るじゃない）……！」

コ、コイツら……！人の都合も知らねえで……！

つつか……！……そもそも灰原が余計なチャチャ入れっからじゃねえか……！……！

…しゃあねーな、灰原がワリイんだぜ…

今日の事は感謝してるが、ソレとコレとは話が別だ！！

特大の爆弾落としてやっからな…

「…そんなに知りてーか？」

「…おう（はい）（うん）！！」「」

灰原は怪訝な表情でオレを見る。

「それはだな…」

「…それは…？」「」

灰原はまさか本当に喋る気！？…ってな顔をしている。

灰原よお…オマエの考えてる事とはチヨット違うんだぜ。

「…オレが昼休みの屋上で灰原に告った。灰原はOKした。ただそれだけ」

特大の爆弾を落としたその瞬間、この空間は止まっていた。

ジヨジヨというなら、時よ止まれ！ザ・ワールド！！

…ってな感じだ。

しばらく放心していた三人は正気に戻り叫んだ。

「…ええ…！…！…」

…そして時は動きだす。

…ってか？

「ホントなの！？哀ちゃん！！」

「そんな！？本当なんですか！？灰原さん！！」

「…そうなのかよ？灰原あ」

歩美と光彦はなんで、そんな必死になってんだ？

元太は冷静だな…

それとも、探偵ゴツコと喰いモン以外は基本的に関心がないのか？

「……………」

灰原は未だに放心している。

「哀ちゃん教えてつてばー!!」

「…灰原…さんが…コナン君…と…」

歩美…灰原には聞こえてないぜ。

それと光彦…何故、呆然としてんだ？

もしかして、灰原の事が好きだったのか？

歩美の事が好きだったと思ってたんだが…

そして元太は

「オマエら、もうキスとかしたのか？コナン」

放心している灰原は放ってオレに訊いてくる。

「…ああ、したぜ」

包み隠さず言う。

「マジかよ!?コナン!!! すごい!!!」

流石に元太も興奮せずにはいらねえか…

「…哀…ちゃん…(灰…原さん)…と…コナン…君が…キ…キス

…」

…対象的に二人は完全に呆けてんなあ…

…まあ、オレ達は一応まだ小2だもんな…驚くか。

「…工…江戸川君!? 貴方なに言ってるのよ!!!」

灰原は気が付いてオレに問詰める。

「ん…? キスする程、愛しあってる仲って言ったんだよ」

灰原は真っ赤になって

「確かに貴方の事好きだし!!! キスもしたわよ!!!」

でも、皆の前で言わなくてもいいじゃない!!!」

…灰原…それ自爆だぜ…

「…ホントにしたんだな…オマエら」

「…あっ!?!」

自爆して元太に突っ込まれ、灰原は完全にオレと付き合っている事を皆に白状する事になった。但し、本当に付き合い始めた日は黙って…だけどな

現時刻は21:00

場所は阿笠邸の近くの公衆電話。

今日は博士の家に泊まる事を伝えているので蘭やおっさんに心配をかける問題はない。

蘭の携帯に電話をかける。

「…もしもし?」

…蘭が電話に出た。

「…蘭か?…オレだ…」

「…新一?」

これから言う事を考えると辛いな…

「…ああ」

「…一体、今まで何してたのよ…新一ずっと帰ってこないから卒業出来なかつたんだよ…」

…いいんだよ。今の姿じゃ、できねーんだから。

「…分かってるさ…でも、もういいんだ…」

「…もういいって…どうしてよ?」

やっぱそう思うよな…

「…学校は中退すんだ…オレはもう、そっちに戻る気はねえんだよ」

「…どうして!? 帰って来るんじゃないの!?!」

最初は、そのつもりだったさ…

「…ワリイ…オレさ…どうしてもやらなきゃならねえ事を見つけちゃったんだよ」

「…私ずっと待ってたのよ! 新一がやらなきゃならない事って、帰って来る事よりもそんなに大事な事なの!?!」

「…ああ」

「私、新一の事が好きなの!…だから…」  
…すまねえ…それは無理なんだ。

「…それでもオレは帰れねえんだよ…」

「…なら、せめて…」

…それでも無理なんだ。

「…今まで待たせて済まないと思ってる。

その事に対しては、身勝手だけど謝らせてくれ」

「…なんで…謝るの？」

「それに、オレのやる事に蘭を傍に置く事は出来ないんだ。

…オレのやりたい事ってのはな…今まで追ってた事件の中で出会った娘の事だ」

「…えっ？」

突然のオレの話に戸惑う蘭。

「…アイツは事件の事で相当苦しんだ。

オレはそんなアイツを守ってやりたい…傍に居てやりたいんだ。

…愛してるんだよ…アイツの事を…」

「……………」

言葉を無くす蘭。

「…だから、オレの事は忘れてくれ」

「…そんなの…そんなの認められないよ…認められないわよ…！」

…もうこれ以上は無理…か…

「…構わない…オレが決めた事だから…」

だから…ここで断ち切るんだ…

「…さよなら…蘭」

そして受話器を離し

「えっ？待って！？待ってよ新一…！」

受話器から聞こえる声を無視し、

…そして切った…

阿笠邸に戻ったオレは、リビングでオレの帰りを待っていた灰原に話し掛けられた。

「…どう…だったのかしら？」

灰原は心配そうにこちらを見る。

「…納得はしてもらえなかった…だから…」

…最後の手段を使った。

「…そう」

灰原はオレを抱き締め

「…それは、辛かったでしょう？」

優しく声を掛けてくれた。

「…ああ…でも、もう大丈夫さ…」

オレも灰原を抱き締めて

「…灰原がいてくれるから…」

…オレ達は、今夜は一緒にベッドで寝ている。

蘭の事で、お互いが罪悪感を感じていたし。

お互いの傍で安らぎを感じなければ、とても寝られなかったからだ。

それに…今日の事は決して悪いものではなかった。

そう…俺たちはお互いの存在が、

…如何に大切な者なのかを、

再確認する事できたんだから。

FILE 2：戸惑い・暴露・そして別れ（後書き）

書きたい事を書いていたら、若干字数をオーバーしてしまいました。今回はシリアスにコナンを迷わせ。中盤コミカルに展開し、そしてシリアスに悲しい別れを持っていきました。

蘭：辛い役所にし過ぎな感じですね…

別にわたしは蘭が嫌いなわけじゃないんです。

蘭よりも哀が好きただけなんです。

それにコナンと哀でシリアスやらせると…どうもこんな展開になつてしまつんですよ。

安易に蘭に引かせて、コナンと哀が気兼ねなく付き合う事が出来る状況に持ち込みたくないんですよ…哀が好きなのに。

こんな厄介な作者ですが、次回も読んで貰えると嬉しく思います。



FILE 3：二人の現状、蘭の現状 前編（前書き）

服部初登場。

FILE 3：二人の現状、蘭の現状 前編

蘭に別れを告げて翌日、大阪から服部がオレを訪ねてきた。

「よう、工藤聞いたで毛利の姉ちゃんとは別れたんやっとな…」

「服部！？オマエ何時来たんだよ！」

オレは突然の服部の訪問に驚く。

「今日や。工藤に会いに探偵事務所まで行ったんやけどな、オマエはおらへんし、何故か暗い顔した毛利の姉ちゃんがおるんで、毛利のおっさんに事の顛末を聞いてきたつちゅうわけや」

…それで蘭の話が出て来たわけか…

「そうか…まあ、服部が言った事は事実だよ」

服部は神妙な顔をして

「ホンマの事やったんか…

…で、理由はあるんか？」

理由を訊いてきた。

「…ああ、ある」

…色々とな。

「…そうか…工藤、問題あらへんのやったら、その理由教えてくれるか？」

…別に教えてもいいか…服部だからな。

「第1の理由は、毒薬のデータが入手出来なかった事が一つだ」

「データが入手できなかったつちゅう事は、解毒剤が作れへんかったんで何時元の姿に戻れるんか、分からへんかったからか？」

「…ああ」

流星、服部だ。それだけでオレの言おうとした事を分かってくれる。

「…工藤…それだけやないやろ？」

…もう、例の組織はブツ潰したんやさかい、毛利の姉ちゃんに真実を告げても問題あらへんのに、告げどころか別れ話までしとるんや」

服部はオレの思った以上に理解している…

「…工藤、オマエ他に好きな女出来たやろ？」

…オレの予想やと、おそらくは灰原の姉ちゃんってところやな  
ああ、その通りだよ。

「……………ああ」

「幾ら、今の工藤が小学生やゆつても普通の小学生の事が好きになるとはとてもやないが思うてへんのや」

まあ、当然と言えば当然だよな。

オレは内心で苦笑する。

「唯一、考えられるんは精神年齢がほぼ変わらん灰原の姉ちゃんのみ」

服部は笑いながら

「…まあ、工藤がロリコンやない限りはな…」

失礼なことを言いやがった。

「…で、どうなんや」

「どうなんやつて、何がだよ？」

そんだけじゃわかんねえんだよ。主語を付ける。

「かあ〜っ！！決まつとるやないか！灰原の姉ちゃんとは何処までいつとるんやつて訊いてんのや！」

服部は興味津津で訊いてくる。

「…付き合ってるよ」

オレは正直に言った。

「ホンマか！？ホンマにあの姉ちゃんと付きあってるんか！？」

オレの言った事に驚く服部。

「…服部：オマエ疑ってるのか？」

本気で付き合ってたぞ。

「…別にそないな事はないんやけど…」

…しかしあの灰原の姉ちゃんやぞ？」

そう、服部が口を滑らした時、

「悪かったわね」

そう、いいながら自室から出て来た灰原。

「…なつ!?!?…なんや!?!」

おい、工藤!?!…なんで灰原の姉ちゃんが  
おる事教えてくれへんかっ  
たんや!?!」

「バーロー、ここは博士の家なんだから居んのは決まってるだろー  
が」

「あつ!?!そやった!?!」

抜けてんじゃねえよ…服部…

「…あああ、あのやな!?!さっきの言葉の綾うちゅうか!?!」

おいおい、誤魔化す心算かよ…

「…別にいいわよ。わたしのキャラクターではないって正直に言っ  
てくれても」

灰原はそんな事を許す訳が無く、追いつちをかける。

「そ…そんな事あらへんって…」

「いや、ちいとは思ったかもしれへん…」

否定しつつも、最後は小声で認める服部。

…オマエ…情けないぜ…

「…まあ、いいわ。それより服部君、和葉さんはどうしたのかしら  
?」

灰原は服部に和葉さんはどうしたのか訊くが多分…

「…和葉?…和葉なら今は毛利の姉ちゃんのとこにおるで?」

やはりか…

「…別に、そういう意味だけで言ったわけじゃないんだけどね…」

…灰原…服部をからかう気か?

「そういう意味で…」

…って!?!?和葉はそないなもんやないで!?!」

服部は力強く否定する。

「あら?これじゃあ和葉さんも大変ね」

.....。  
「なっ……なんでそないな事にならなあかねん!？」  
そう服部が言った時、

「平次!酷いやん!」

「かかかかっ!?!和葉!?!違うんや!?!」

服部は驚きこちらを向く。

「…なーんてな」

そしてオレは変声マイクのスイッチを切る。

「クスクス」

灰原も笑いを抑えきれないようだ。

「…くっ!?!工藤!?!」

素頓狂な声をあげた服部は

「…驚かすなや!?!マジでビビったやないか!?!」

抗議を露わにする。

「いやあ、こんな手に引っ掛かるとは思わなかったぜ」

本当にな。

「工藤君も面白い事をするわね」

灰原にしても面白かったようだ。

「それだけは勘弁やで…ホンマ心臓に悪いわ」

服部は本当に堪えたようだ。

「そついえば、なんで二人は名字で呼び合っんや?付きおってんのやろ?」

服部は突然そんな事を言う。

「…えっ?」

オレ達は突然の服部の発言に戸惑う。

「付きおってんに、名前で呼ばへんのかてゆうてるんや」

確かに、付き合い始めてからも名前で呼び合ってははいない。

「…そういや、そうだな…」

「えっ？…工藤君？」

灰原はびっくりした顔をして、オレを見る。

服部の言った事がオレにとっては大事な事であるように思えた。

「別に名前で呼び合ってもいいんじゃないか？」

…いいだろ？哀」

灰原に…哀に確認を取る。

「…いつ…いいわよ…」

…じゃあ、わたしは新一と呼べばいいの？

…それともコナン？」

オレ達は普段偽名を名乗っている。

いや、今のこの姿ではコナンの方が本名になるのか…

だから、どっちの方の名前が良いのか訊いたんだろう。

「普段はコナンでいいさ。哀だって本名じゃないだろ？」

「ええ、そうよ…けど…コナンは覚えてる？わたしの本名」

哀は呼び間違えそうになりながらも問い掛ける。

大丈夫さ。

哀から前に聞いた時から覚えてるよ。

「…志保…宮野志保…当たってるだろ？」

哀は嬉しそうに微笑みながら、

「ちゃんと覚えてたのね…」

そう言う。

「あたりめえだろうが、好きな娘の名前を覚えてねえわけないだろ」

そう言った後、オレ達は見つめ合う。

「…コナン」

「…哀」

そして、キスをしようとしたところで、

「…オレの事忘れてんやろ…」

服部に邪魔された…

「…あつ!?!?」

いや、今回は止めて貰った方がよかったのか?

服部は苦笑しながら

「まあ、案外うまくやってけそうやないか。

…オレが居る前でそこまで見せつけられると堪らんけどな」

やれやれといった態度を取る服部。

「…まあ、事情は分かったし、それにええモンみせてもろたわ。これから和葉んとこ行くんやけど二人はどないする?」

そうだな…蘭の事も気になるんだが…

「哀、どうする?」

哀は少し躊躇しながら

「…行きましょう。」

…蘭さんの事、お互い気になるでしょう?」

そう言った。

「…そうだな」

オレは哀の手を握り締める。

「じゃあ、ほな行くかお二人さん」

哀と手を握りあつたまま服部に続く。

…毛利探偵事務所、小さくなってから二年間世話になった場所であり、蘭の実家でもある。

…正直、今の蘭の状態はオレ達二人にも辛い状況だがどうする事も出来ない。

…オレ達二人に出来るのは江戸川コナンとして、灰原哀として慰める事だけだ。

…偽善だつてのは分かつてる。

…自分達に原因があるのにそんな事をするのは自分達の為、自己満足の為だつて事ぐらいは…

…それでも、オレ達に出来るのはそれぐらいしかないのだから。

不安そうな哀の手を強く握り締めて、哀の緊張を出来るだけ取り除く。

オレ達二人は服部に続く形で毛利探偵事務所に入った…



FILE 3：二人の現状、蘭の現状　前編（後書き）

本当は一話で収める積もりだったんですが…

執筆中に平次やコナン達が思った以上に動いたというか、ネタが出て来るといっか…

そんな訳で前後編に分けました。

次は後編で収まれば良いんですけど…

FILE 4：二人の現状、蘭の現状

後編（前書き）

今回、小五郎と和葉が初登場。

FILE 4：二人の現状、蘭の現状 後編

服部に続いて入ったオレ達はオツチャンに話し掛けられた。

「…ああ、お前らか：どうしたんだ？一体」

オツチャンも少しテンションが低いみたいだ。

「オレらはアンタの姉ちゃんの様子を見に来たんや」

服部がオレ達を代表して言う。

「…そうか、なら蘭を励ましてやってくれないか？そうしてもらうと助かる」

オツチャンは真剣な表情で頼んできた。

「わかっとるわ。おっさんに言われんでもな」

オレ達も蘭を立ち直らせる事が出来ればいいと思った。

「よう、和葉。どないなつたんや？」

オレ達は部屋の前で和葉さんに会った。

「平次：まだダメみたいやわ」

和葉さんでも無理か：

「…そんなに悪いんですか？」

哀が和葉さんから、蘭の状態を確認する。

「哀ちゃんも来てくれはったんか」

「はい、コナンと一緒に話を聞いたので」

オレも哀の言葉に続いた。

「うん、僕と一緒に聞いてたから一緒に蘭姉ちゃんの所に行こうって」

正確には哀が言ったからと言うのが正しいけど。

「そっかあ、二人共蘭ちゃんの事励ましたってな」

オレ達は蘭の私室にノックして入り、蘭に声を掛ける。

「…蘭姉ちゃん、元気ないみたいだけど大丈夫？」

「…コナン君」

やはり相当落ち込んでいる…

「…お姉ちゃんが元気ないって聞いたから心配したの」  
哀もその理由を知っている。

「…哀ちゃん」

特に自分が原因になっていいる事ぐらいは自覚してるから、哀にしても今の蘭の姿は辛いみたいだ。

「…オレも和葉と一緒におっさんの話を聞いたとっささかい、何があったか詳しく話してくれへんか？」

服部は別れた事は知っているし、理由としては仕方ないだろうと思っっている節が強い。

「…服部君もお父さんから聞いたんだ」

「ああ、聞いたで。詳しくはしらへんけどな」

少なくともオレ以外のヤツからは、と言っ意味だろうな。

「…新一がね…もう帰らないって…好きな娘ができたから…その娘の傍にいて…」

昨日の夜の事を話したす蘭。

「…工藤の奴、そんな事言っつたんか」

ある意味、オレ達は酷いよな…その別れた理由と隠された真相を知ってる…

それでも、オレ達は知らない振りをしてここにいる。

…そして、江戸川コナンの正体が工藤新一だっ事隠している事もそうだ。

「…私はずっと待ってたのに…帰って来てほしいって言ったんだけど…」

途切れた蘭の言葉を、オレが繋げる。

「新一兄ちゃんはそれでも、帰らないって言ったの？」

「…そう」

そして、蘭は俯く。

「ねえ？お姉ちゃんは何故、新一さんを待ってたの？」

哀が蘭に待っていた理由を訊いている。

「…新一の事が好きだったから、ずっと一緒にいられると思っていたのよ」

暫く部屋は沈黙していたが服部が口を開く。

「なあ？なんですつとおると思つとつたんや？」

服部は蘭に問い掛ける。

「えつ？」

蘭は何故ずつと一緒にいると思つたのか、と言われて困惑している。

「なんで、工藤がずつとおると思つとつたんかて言つてるんや」

服部はよりハッキリと問い質すように言っている。

「だつて…私と新一は幼馴染で…ずつと一緒にだつたから…」

蘭は途切れ途切れになりながらも服部に答える。

「幼馴染やからゆうても、一緒におるケースなんてのは案外少ないモンなんやで？」

服部はそんな蘭に対して、そんなのは理由にならないと言っている。

「…でも、服部君は…」

そんな服部に反論する蘭。

「今も、和葉とおるつちゆう事か？」

蘭が言い切る前に言ってしまう服部。

「……………」

先に言われて沈黙する蘭。

手加減無しの服部相手に反論する事は難しいだろうな。

「確かに今迄は和葉と一緒にあったし、これからもずつと一緒におると思う」

服部なりの説明を黙って聞く蘭。

そんな蘭を複雑な様子でオレ達は見ている事しか出来なかった。

「…でもな、和葉はどうか知らんし、何処まで一緒におられるかゆうんはオレにかて分からのや」

確かに自分と同じ考えを相手が持っているとは限らない。

「…相手が幼馴染でも、自分と同じ考えをしているとは限らないって事？」

哀が服部の考えを蘭に聞かせる様に確かめる。

「そうや、幼馴染かてゆうても結局は他人や」

「…でも、新一は…」

服部は蘭の言葉を遮る。

「待っててくれ言っただんか？」

「…そうよ」

服部は言い聞かせる様に、

「…あのなあ、姉ちゃん…」

蘭に対して更に問い掛ける。

「待っててくれ言っただかて、それを工藤がどんな意味でゆうたか分かってゆうてるんか？」

純粹に幼馴染を心配掛けんとゆうたかも知れへんやないか」

そんな服部に蘭は反論せずにはいられなく、

「…でも、あれは…」

それでも、服部は反論させない。

「仮に好きな人としてゆうた事にしたところで、人は変わるもんやで」

…そうかもな、オレがそうだし。

「…幼馴染ゆうんは案外近くてお互いの感情に気付かないモンや、恋やと勘違いしたっておかしくない。

好きなんに幼馴染としてしか見てへんと思ひ込む奴もある」

…それって、服部の事も入ってねえか？

まあ、服部の場合は素直になれねえだけかもしれねえけど…

「…工藤は他に好きな女ができて姉ちゃんへの思いの違いに気付いたのかも知れへんし、単に好きな女が変わっただけなんかもしれん」  
哀の事を好きになっただな…蘭への思いの違いに気付いたのは…

「それは工藤本人に訊かな分らんしな」

後で、服部に訊かれそうだな…

「…ようは姉ちゃんの気持ち在实际にどうなんかつちゅう事や。

姉ちゃんが工藤の事を幼馴染やから好きやったのか、好きになった  
んが単に幼馴染だっただけやったのか」

オレ達も蘭も黙ったまま聞いている。

「少なくとも、その事に対して答えを見出だせへん限りは、先に進  
まんぞ？」

服部はそう締め括った。

「…まあ、キツイ事もゆうたけど、オレらが心配したんは間違いな  
いで。

少なくとも二人は純粹に心配しとったんや」

服部：オマエ…

「…その、お姉ちゃん…元氣だしてね…」

服部の心を汲んで蘭を励ます哀。

「…僕は…蘭姉ちゃんに元氣になってほしい」

オレも服部の思いを無駄にはしない。

「…ごめんね…心配かけて…もう少し…待っててくれないかな？」

蘭はそう言ってきたので、

「…うん」

オレと哀は頷くしかなかった。

蘭の部屋から出て、オレ達は和葉さんに部屋の中であった事を話  
した。

「そっかー、そないな事があつたんかあ」

「和葉姉ちゃん、平次兄ちゃんの事怒らないでね」

服部には感謝してるんだ。

オレ達じゃ無理だったからな。

「怒らへんよ…ウチじゃ慰める事しか出来へんかったし、平次は蘭  
ちゃんに考えさせるようにしたんやもん」

良かったぜ…服部が和葉さんに怒られないで済んで。

「ありがとう和葉姉ちゃん、良かったね平次兄ちゃん」

「…おっ!?!おっ!?!」

服部もそんな覚悟はしてたみたいだけど、和葉さんの一言に驚いてたみたいだ。

「…でも、平次兄ちゃんも凄いやね。和葉姉ちゃんはどうか知らないけど、平次兄ちゃんはずっと一緒に居たいなんて言うんだもん」  
「チヨットお節介を焼かせて貰うぜ。」

服部と和葉さんも少しは素直になってもいいと思うからな。

「くどっ!?!?コナン君!?!」

「…えっ!?!?平次!?!」

二人はびっくりして。

服部はオレを見て、和葉さんは服部を見る。

…哀は「それもいいかもね」とオレを見る。

今回は服部に世話になった…本当に感謝してる。

いい加減二人も素直になつて幸せになつて欲しいとオレは思う。

オレも哀も二人がここに来なかったら。

…蘭に素直に会いに行けたか分からなかっただろうからな…



FILE 4：二人の現状、蘭の現状 後編（後書き）

今回は平次が喋り続けてた感が、否めないなあと自身思いました。  
コナンも哀もあまり喋ってなかったですし…  
小五郎なんてホンのチョットしか出てません。  
蘭も未だに立ち直らせずにいますから…  
立ち直らせるのはいつの日になるんでしょうかね…

今回は平和にスポットが当たります。

こっちは無難に終わりそうです…多分ですが。

**FILE 5：平次と和葉、コナンと哀（前書き）**

サブタイ通りのカップリングです。

## FILE 5：平次と和葉、コナンと哀

「…なあ、平次…それホンマ？」

和葉さんは服部の顔を伺いながら心配そうに訊いている。

「…かつ！？和葉！？」

服部はまだ動揺してるみたいだ。

「…どうなん？」

和葉さんが再度訊いて、服部は覚悟を決めたみたいだ。

「…事実や。嘘ついてもしかやあないやる。オレが和葉とずっと一緒に  
おりたいゆうたんは、ホンマの事や」

…ああ、何て言うか…オレが蹴仕掛けたんだけどよ。

服部がそこまで言うとは思わなかったぜ…

もう少しゴネるかと思ってたんだが…

「…平次…ウチも平次とずっと一緒にいたいねん。

ウチは平次の事ずっと好きやったんやもん」

和葉さんは顔を真っ赤にして言った。

和葉さん、オレ達の事、忘れてねえか？

「…和葉」

服部もオレ達の事忘れたのかよ！

なんだ！その…二人だけの世界作ってます。みたいな雰囲気は！

「…平次はどうなん？ウチ期待してもええの？」

オレは哀を見る。

哀は「コナン、貴方はここまで行くと予想してたの？」って、視線  
で言っている。

オレは「そこまで予想してねえよ！」と、視線で返した。

「…オレは和葉の事が好きや。付き合ってくれへんか？」

オレも哀も予想だにしてなかった。

「…ええよ」

二人は少し素直になってもいいんじゃないかねえの？の、つもりだったの

に。

まさか、それをすっ飛ばして告白まで行って恋人になっちまうとは。

気付いた時、二人はキスしようとしていた。

オレは哀に「どうする？」と、視線を送る。

哀は「別にいいんじゃない？」と、視線を返してきた。

オレは考えた。二人は…というよりは服部が素直になる事なんて滅多にねえんだから、邪魔しないでおこうと決めた。

ってか、もうしてるし！

「和葉…これからよろしゅうな」

「うん」

さて、どうすっかなあ…

…何て言うか、話し掛ける切っ掛けが掴めねえ…

哀を見ても首を横に振っただけ、哀にもどうにもできないらしい。

取り敢えず割って入るか。

「…あの…僕達の事、忘れてない？」

「…へっ？」

二人はオレの方を見て鳩が豆鉄砲を食らったような顔をした。

「コ、コココココナン君!？」

「…なっ!?!?なんで、ななっなにかゆゆうてくれへんかった!」

二人共動揺している。。

服部、オマエ吃り過ぎ。

「…何て言うか…二人に話し掛けづらかったんだよ」

オレ達が話し掛けにくかったのは本当の理由だ。

「コナンもわたしも二人がそこまでするなんて思わなかったわ」

すかさず哀も口に出す。

服部も和葉さんも顔を赤くして黙り込んでしまう。

「…お前ら二人かて似た様なもんやないか…」

服部!?!いきなり何を言い出すんだよ!

「えっ?コナン君と哀ちゃん?」

和葉さんも反応しないでくれ!

「…そうや、こん二人もこっちが当てられてまっほど好きあつてるんや」

哀を見ると顔を赤くしてうるたえてる。

「…二人共、そうなん?」

「…うん」

「…はい」

オレ達スゲエ顔赤くなつてんだろっな。

「かわええなあ、二人共」

「それだけやないで、こっち来る前も、オレがおる前でキスしようとしてたんやで」

服部はニヤニヤと笑いながら言いやがった。

「平次兄ちゃん!?!」

黙つてたからつてそれまで言うのかよ!

「…ハア…今時の小学生はそこまで進んどるんかあ」

実際、オレ達小学生じゃないです。

「ちやうちやう、この二人が特別なだけや。大体、こんぐらい時はからかわれるんを嫌がつてベタバタせえへんもんや、普通はな」

普通つて強調すんじゃないやねえ服部!

「あつ…そうや、どうも違和感あるう思つたら、毛利のおっさんがおらへんやんか」

…本当に居ねえ。道理で二人の告白が上手く行つた訳だ。

「あー、なんて言うたらええんやろ…出かけてくゆうたんは知ってるんやけど、どこに出かけてんかは知らんねん」

オツチャン、行き先を言わなかったのか。

「二人はおっさんのおるところ分かるか？」

服部はオレ達にオツチャンの居場所を訊くが、

「…さあ？」

「わたしも知らないわ」

さつきまでのオツチャンじゃ何処に出掛けたかなんて分からねえぜ。それに哀じゃ普段オツチャンでさえ居場所の予想なんてつけねえし。…じゃあないな。書置きだけでも、置いてお暇するしかあらへんな」

服部はメモ帳から一枚ちぎり、ペンで帰る旨の意味を書いている。

「もう、帰るん？」

服部はそれをオツチャンのデスクに置いて、

「そや、時間的にも、チエックインせなあかんし」

時計を見ながら言う。

「あれ？平次兄ちゃんここに暫くいるの？」

「当たり前やないか。日帰りなんてするわけないやろ」

まあ、確かにこんだけの事だけで大阪から来るとは思ってたねえよ。

「一週間程滞在する予定やねん。ホンマは蘭ちゃん誘ってどっか行こう思ってたんやけど」

蘭の今の状態では無理になったって事が…

「まあ、そんな訳で予定変更してこの辺周って一週間過ごす予定や」卒業記念旅行の腹積もりで来たのか…

「そうや！今度の土曜日はウチと平次とコナン君と哀ちゃんの四人でデートせえへん？」

和葉さんはいい事考えたようにニコニコしながら提案してきた。

「…えっ？」

「そやな、それええんとちゃうか」

オレは付き合い始めた頃から考えてみて、

「…そういえばまだデートしてないよな…」哀も同じ事を考えていたのか、

「…そうね」

同意する。

「哀、デートするか？」

オレは哀に訊いてみた。

「…いいわよ。楽しみにしてる」

哀もOKしてくれた。

「なんや知らんけど、二人共妙に大人っぽい受け答えやねえ」

拙い！？つい素になっちまった。

「…和葉は知らんかったか？」

…なっ！？服部何を！？

哀も同様に服部を見る。

「コナン君は普段、猫被ってるんや。

この二人、頭も並みの大人よりええし、落ち着いてる部分もある。

哀ちゃんは普段と変わらへんけど、コナン君は普段子供っぽく演じ

てるんや。

実際、喋らすと全然違うんやで」

服部は「どや？これで少なくとも和葉の前で猫被らんでええやろ？」

と視線で言う。

服部の馬鹿野郎！驚かすんじゃないやねえよ！

「…なんやそんな事やったんか。道理でコナン君がたまに大人っぽ

く見えた訳や」

こりゃあ、下手に誤魔化すよりそっちに話持って行って誤魔化すし

かねえな…

「…あつあはは、そうなんですよ」

哀はこつちを見て、

「…よかったわね。和葉さんの前で猫被らなくて済みそうぞうで」

そう言い、哀もそっちに持ち込んで誤魔化す事にしたようだ。

「ああ、ホントにな…」

オレのミスから始まってっけど服部のおかげって言うより服部のせいだよな。

「ふーん、それが素のコナン君なんか…」

完全に素じゃないけど、

「ええ、やっぱ変ですか？」

本当に素になるわけにはいかねえし。和葉さんの前で服部に素で話し掛けたらヤベェんだよな。

「そないな事ないけど、まあ、敢えてゆうたら子供っぽくないぐらいやなあ。ウチに対する言葉使いが丁寧やもん」

「…だから、普段猫被ってるんですよ」

その後、服部と和葉さんと別れて、オレは哀と一緒に博士の家に帰っていた。

「さっきのはホントヤバかったよなあ」

なんとか誤魔化せたもんな。

「ホントよね…わたしもうっかりしてたわ」

オレは哀の方を見て、

「哀もなのか？」

訊いてみた。

哀がうっかりするような事なんてねえと思ってたんだがな…

「ええ、デートの事を考えてばかりで、実際に周りの事気にしてなかったわ」

「…オレも哀の事しか考えてなかった」

お互い同じ事考えてた訳か…

「…わたし達ってお互いの事を考えてると周りが見えなくなるみたいね」

「…そうみたいだな」

これって、自分で言うのもアレだけど。オレ達が愛しあってる証明なのかもな…



FILE 5：平次と和葉、コナンと哀（後書き）

前回、最後の方は小五郎がいてもおかしくなかったんですけど忘れてました。しょうがないんで外出中という事に…  
取って付けたみたいになってしまったかもしれないんですが…

コ哀、平和、次はどうしようか考え中です。

**FILE 6・初めてのデート（前書き）**

今回は甘々で長い話になります。

## FILE 6：初めてのデート

和葉さん達とダブルデートの約束をしてから一週間たった土曜の朝、オレは博士の家まで哀を迎えに行った。

「あーいー、来たぞー」

呼鈴を鳴らしながら哀を呼ぶ。

暫くして玄関のドアを開けて哀が来た。

「待たせたわね。行きましょ」

哀は淡い感じの蒼白いワンピースを着て、肩から白のトートバッグを提げていた。

「……………」

オレは普段見ない哀の姿に見とれていた…

「…コナン？…どうしたのかしら？」

哀はそんなオレを見て首を傾げながら問い掛けている。

「…可愛い」

哀はほんのり顔を赤くしながら、

「…えっ？…あっ…ありがとう」

オレは気を落ち着かせる。

「…普段そんな格好しねえから驚いたぜ」

哀ははにかみながら嬉しそうに、

「…デートだから、着飾ってみたのよ」

オレもそんな哀が可愛くて、

「ああ、似合ってる。行こうぜ哀」

そう言い、手を差し出す。

「…ええ」

哀はオレの手を取り、歩き出す。

今回、服部達とデートに来たのはトロピカルランドだ。

「今日はここで遊ぶのか…」

哀はこちらを見て、

「コナンは遊園地で遊ぶのは苦手？」

心配そうに訊いてくる。

「…いや、遊園地ってろくな事が起きた事がなくってさ」

といっても、悪い事はかりじゃねえけど…

「…そういう事ね。でも、今日はそういう事は極力考えない様にね」  
そのおかげで哀と出会えたしな…

「ああ、哀との初デートだからな」

そう言い、哀に笑いかける。

「二人共、そのぐらいにしときいや。オレらもおるんやで」

そんなオレ達に服部が横槍を入れる。

「…平次の言った通りや。ホンマに二人はラブラブなんやねえ」

和葉さんはオレ達をからかう気だ。

ラブラブなんて言われて、

「…あの…ラブラブって」

哀は恥ずかしいらしい。

オレもだけど…

「…ホンマの事やん。そういう事考えんといてなんて、自分との事  
だけ考えて欲しいゆうてるんと同じやん」

…確かにデートでそんな事言えばそう取れるけど…

多分、哀はそんな事考えたとまた変な事件が起きると言いたかつ  
たんじゃねえかと思う。

「…和葉、あんまりからかったらあかんやろ」

服部は和葉さんを窘めるけど、

「だつてえ、この二人めっちゃ可愛いんやもん」

和葉さんは止まらないようだ…

暫くからかわれたオレ達は時間がなくなる事もあつてなんとか解放  
された。

「ごめんなあ、ウチもつい二人をからかいたくなんねん」

和葉さんは流石にからかいすぎたと思つてか、謝罪してきた。

「…いえ、気になさらなくても構いません」

「ええ、オレ達もその辺りわかっているんで」

まあ、しゃあねーよな…オレ達つてからかいやすいだろうし。

「…ホンマ、大人みたいやなあ二人は」

和葉さんはしみじみといった感じで言う。

「だから、ゆうたやる。こん二人はそうゆうんやって」

服部はウズウズしながら、

「それよりも、はよう遊ぼうやないか」

服部、オマエそんなに早く遊びたいのか…

「…そうやね。まずはジェットコースターあたり行こか？」

ジェットコースターは朝早くから来た事もあつて比較的早く乗れた。身長制限にお互い引つ掛からなくて済んだのは良かったぜ。

並んでたのに身長制限に引つ掛かつて乗れなかつたら最悪だったからな…

その後も絶叫系のアトラクションを中心に乗り回していたが、流石に哀が疲れた様で休憩する事にした。

「哀、大丈夫か？」

哀は少しフラフラしていたからな、オレとしては心配にもなる。

「…ええ、少し疲れただけよ」

息も上がっているが、本人がこう言っているんだから大丈夫か…

哀はこういう時には正直に答えるだろうし。

「スマンなあ、ついオレもはしやぎすぎてしもうたわ」

本当に、テメエははしやぎすぎだ！哀の体力の事も考えやがれ！

「ウチもや。哀ちゃんの事考えて、もっと落ち着いたもんにしとけばよかったなあ」

…つてーか、オレもそうすれば良かったんだ。

…哀、ごめんな。

「…いえ、気にしないで下さい。」

…わたしも、すっかり自分の体力の事考えていませんでしたから  
哀は和葉さんが気にしない様、自分も悪いのだと言った。

「二人共、そこで休んでおればええか。」

和葉、二人に飲むもん買ってきてくれんか？」

オレはともかく哀には必要だな…

「ええけど、平次は？」

服部は真面目な顔で、

「オレは便所や」

…デートの最中にハッキリ言うな。

「…わかったわ。ウチも、はよう飲むもん買ってくるつもりや。平次も、はよう戻ってきていいや」

チヨット呆れ気味の和葉さんはオレ達を心配してか服部に注意をする。

「わぁーとるわ」

服部もその辺の事が分かってるのか了承する。

「じゃあ、二人共待っててえな」

「…はい」

オレ達は和葉さんと服部が見えなくなってから、

「哀、楽しんでるか？」

完全に素に戻る。

「ええ、…組織の影に怯える事もなく心の底から楽しんでるのは初めてよ」

オレは哀が心の底から嬉しそうに笑っているのが分かった。

「何もかも本当に初めてなのよ。男の子とデートをするのも、好きな人と一緒に遊園地に行くなんて事も以前のわたしでは考えられなかったわ」

オレは無性に哀を抱き締めたくなった。

「…あ」

と、思った時にはもう抱き締めていた。

「…哀、これからだってまだまだ楽しい事はいっぱいあるんだ。オレはオマエと一緒に色々な事をしようと思ってるんだからな。覚悟しとけよ」

哀は今迄、こんな普通の事を楽しんで来れなかったんだ。

だから、オレが普通の人の楽しみみてヤツを教えてやりたい。

「…コナン」

そう呟いた哀はオレに口付けた。

「……………」

オレはいきなりの事で気が動転していた。

「…ありがとう、コナン」

哀に礼を言われて、動転していた気をやっと落ち着かせてオレは、

「…いや、礼を言われる事じゃねえよ。オレだって哀と一緒に楽しんでんだから」

自分の気持ちを正直に伝えていた。

そのまま二人で抱き合ってたオレ達は、

「…ウチがおらん間にラブラブしてるなんて思ってたわあ」

オレンジジュースを両手で保った和葉さんがいた。

…和葉さんが戻ってくる事、忘れてたぜ…

オレ達はそのままの体勢で固まっていた。

「いやー、遠くてハツキリせーへんかったけど、キスもしてたやん  
それも見られてたのか!？」

「流石に、ウチもビックリや。あまりに自然なんやもん」

あははははは…

オレ達は自然にお互いを離した。

それと和葉さんをお願いする。

「…和葉さん、この事は平次兄さんには黙っててくれませんか?」

流石に哀も自分のやった事を服部にまで知られるのは嫌だろうし。

「わかっとる。流石にそんな事はせーへんよ。そんなんやったら哀

ちゃんに嫌われてまうわ」

その後はお互いに談話して服部を待っていたりして、暇を潰していた。

「スマンスマン、待ったか？」

「いや、遅くて助かったぜ。」

「気にせんでええよ。」

「おかげでええもん独り占めできたし」

和葉さんは最後の方だけ、オレ達だけに聞こえる声で返事をした。

「時間もええ頃合やし、早めにメシでも食つか？」

服部は時計を見ながら言う。

「よく見ると腹立たいいを擦っているのが見て取れた。」

「…そうやね。二人共それでええ？」

「…そうだな、哀に併せるか。」

「哀はどうだ？」

哀はチラッと服部を見てからオレを見て、

「…ええ、構わないわ」

哀も分かったのか苦笑したいのを、無理矢理表情で隠して答える。

「それじゃあ、食べに行くか」

そんな哀を見て、オレは苦笑を堪えきれなかった。

「決まったんやったら、はよう行こか」

安心したかの表情で服部はオレ達を急かす。

「…なんや、平次の方が子供に見えるようやわ」

オレ達の一連の流れを見て、和葉さんはポツリとこぼした。

昼食を摂ったオレ達は服部と和葉さんと別行動をする事になった。

「取り敢えずどうすつかー？」

まだ午後になったばかりで時間はまだまだある。

「…そうね」

哀も、時間に余裕があるのが分かっているのでどうしようか迷っているようだ。



「まあ、ゆっくり散歩しながら決めるんでも、いいんじゃないか？」  
哀はこちらを伺いながら、

「…いいの？」  
と、訊いてきた。

「別にアトラクションに乗るのだけが、デートじゃねえだろ。

…哀に無理させたくねえし、オマエの好きなようにしろよ」

哀はまだ疲れが残っている筈だ。

それに、オレは哀と一緒に歩くだけでも満足できるからな。

「…そう、なら御言葉に甘えさせてもらおうわ」

ゆっくりと歩きながら、様々なアトラクションに乗ったりして、オレ達は二人っきりのデートを楽しんだ。

…途中でメリーゴーランドを見た時には、流石にオレには乗れねえとお互いに苦笑した。

なんせ、オレは男で見た目は小学生でも実際の年は18歳なのだ。

哀は実際の年は19歳だが女の子。

別に乗っても問題なさそうなのだが、

哀曰く「わたしがオレに乗ってはしゃぐ光景浮かべられる？」と言われて、オレは思い浮かべられなかった。

オレは「歩美なら違和感ねえな」と言ったら。哀に「デートしてる時に他の娘の事は考えないの！」と抓られた。

ただ、「…歩美ちゃんなら…二十歳になっても違和感ないわね」と呟いた事に対しては、歩美には悪いがハマりすぎて同意していた。

「…哀、最後にオレ乗らねえか？」

哀はオレが見た方向を見て、

「…観覧車ね」  
と呟いた。

「…まあ、デートの最後の定番って言うぐらい、ありきたりなんだけどな」

ある種の御約束みたいなものだが、

「…別にいいんじゃない？」

…わたしは、そんなありきたりのデートの最後、というのを体験してみたいわ」

そして、観覧車に乗った訳だが、係員に微笑ましいという感じに見られたのは気恥ずかしいものがあつた。

「…観覧車から見る夕日というのも、結構綺麗なものね」

哀はオレの正面ではなく、隣りに座って外を見ている。

「…そうだな」

オレは哀の夕日に照らされている後ろ姿を眺めていた。

「…今日は本当に楽しかったわ。」

…次はコナンから誘って貰って何処かに行きたいわね」

哀は振り返ってこちらを見る。

「…次はオレが誘って何処かに連れてってやるから楽しみにしてる」

お互いに微笑みながらゆっくりと楽しむ。

「…観覧車の定番って言ったらこれだよな」

オレは哀を抱き寄せキスをした。

「…馬鹿ね」

そう言いつつも哀は眼を閉じたので再びオレ達はキスをした。

その後は、お互い無言で時は過ぎ…

観覧車を降りた後も手を繋いだままで服部達との待ち合わせ場所まで行ったのだった。

## FILE 6：初めてのデート（後書き）

今回の話は作者的に結構キツイものがあり、甘いだけの話は苦手な  
んだなと気付きました。

それと隔日ペースで今のところ更新できていますが、何時まででき  
るかなと思い始めてます。

もう一つの作品と併せると、毎日作品を更新してる事になるんで…  
おかげ様でアクセス数も現在1300を超えているので、出来るだ  
け隔日ペースによる更新を心掛ける様に見ます。

取り敢えず次の話をどうするかは決まっていますので、その次の話を  
どうしようかと考えています。

思い浮かぶのは新しい作品のネタばかりで続きの話のネタはなかな  
か出てきませんけど…

FILE7：希望と不安の入り交じった将来（前書き）

― 応今回の話で区切りがつきます。

## FILE 7：希望と不安の入り交じった将来

俺と哀は今、服部達の見送りに来ていた。

「済まんなあ、見送りに来てもらうて」

服部はそんな事をいうが今回、服部のおかげで助かった事がある。見送りに来たいと思ったのはそれだけじゃねえけど、やっぱりオレ達の真実を知っているダチでもあるからなんだぜ。

「ホンマやなあ、ウチらの見送りに来てもらうて、嬉しいわ」

和葉さんも服部に続く形で礼を言う。

「いいえ、昨日のデートのお金も出して貰ったのに、礼をまだ言ってますんから」

それに、哀とデートできたのは和葉さんが誘ってくれたからなんですよ。

「コナンの言う通りです。昨日、楽しく過ごせたのはお二人のおかげですし」

哀もそう思っているのかオレに続く。

「ええねん、ええねん、ウチらが誘ったんやもん」

と、言われても実際は同年代だし一方的に奢られるのも心情的にも悪い気がすんだよな…

「そや、あの程度気にせんでええ。それに俺らが付き合うようになったんはコナン君のおかげやで」

服部はオレを気遣い、むしろ礼を言ってきた。

アレの事か？でもアレは服部がオレの想定以上に正直になったからだろ。

「そやな、コナン君のあの一言がなかったら、まだ付きおうてなかったと思うてるもん」

「…たいした事じゃないですよ…」

実際、そこまで考えて言った訳じゃない。

「コナン君がそう思うてても、間違いなくあの一言が切っ掛けや。」

おかげで俺は正直になれたんやしな」

あれは、蘭の事での礼みたいなモンなんだけど。

「…でも、平次兄さんのおかげで、蘭姉さんは立ち直りかけてるし、和葉さんは一瞬驚いた後、オレ達に訊いてきた。」

「…それ、ホンマなん？」

それに対して、哀がオレより先に答えた。

「はい、お姉ちゃんは一週間程前よりは…表面上立ち直ってきてますけど」

和葉さんは安心したような顔をした。

「そっかー、少し安心したわあ」

まあ、あくまで表面上なんで、内面は分からねえけど…

「…和葉、オレは少しコナン君と席外すさかい、二人で話しして待つてくれんか？」

…服部？なんかあんのか？

「…分かったわ。哀ちゃん、ええ？」

哀はこちらをチラッと見て、

「はい」

と、言った。

オレは服部に連れられて少し離れた所に来た。

「…工藤、さっきの話はホンマか？」

服部は和葉さんとは対象的に、まだ不安が隠せないようだ。

「ああ、少なくとも表面上はな…」

オレは内心、不安が残っている。

「…内心はわからへんか」

服部はこぼす様に呟いた。

「暫くは入念に、蘭の変化を見てみようと思ってる」  
取り敢えずは、今のオレに出来る事をするしかない。

「そればかりはしゃあないやろなあ」

服部は嘆息したように言った。

「仕方ねえよ。幼馴染でも、結局他人は他人だって言ったんは、オマエだぜ」

正にこの前、服部が蘭に言った事が当てはまる。

「まっ、それが灰原の姉ちゃんを選んだ代償うちゅう事やな」

服部は茶化すように言う。

「バーロー、オレが中途半端だっただけの事だよ」

中途半端に、蘭に期待させるような事をしたからな。

「しっかし、大丈夫かいな。十年後が問題やで」

今は、ソックリで通せても、十年経っても全く工藤新一と変わらなければ、不審に思ってもおかしくない。

「…ああ、それが問題だよな。蘭が別の幸せを得る事が出来ていれば、真実を伝える事が出来るかも知れねえが」

希望的な観測の訳だが…

「…出来ておらんかったら、この街を離れる事も考えなあかん…かな？」

後は徹底的にコナンだと言い張るぐらいか…

「…ああ、その辺は哀と相談するさ」

服部は深く考え込んだ後、真面目な顔をして、

「…もし、離れる事があれば、大阪を考慮してくれてええ。

少なくともオレの親父やお袋、和葉にはホンマの事言わなあかんけどな。

…二人に対してはそれなりの事が出来ると思うてる」

服部は大阪を候補に入れといてくれと言った。

「…ああ、哀にも伝えておく」

服部、心配してくれて、ありがとうよ。

オレ達が戻ると二人は何を話してきたのか訊いてきた。

「秘密や、秘密。二人かて、オレらがおらんかった時の話を、オレらに言う事出来るんか？」

実際は、和葉さんに言えねえだけなんだけどな。

「あー、無理やわあ」

和葉さんは即答した。

二人共、何話してたんだろう？

「分かればええんや。それに時間もあらへんぞ」

和葉さんは腕時計を見て、

「ホンマやんか！

二人共済まんなあ、もう時間なんよ。慌ただしくなっけしもうたけど、ウチらもう行くわ」

哀は少しばかり残念そうに、

「…そうですか、また来て下さいね」

そう言い。オレは努めて明るく言った。

「今度はオレ達がそっちに行くかもしれませんが」

服部は笑いながら、

「わあーつとるわ。ほな行くで和葉」

和葉さんを引つ張り、

「わかつとるよ。二人共、また今度な」

和葉さんは引つ張られながら言った。

「はい、それではまた」

「次、会う時を楽しみにしてますよ」

そして、服部達は一週間の滞在を終え、大阪に帰っていった。

まだ、昼になつてもなく、特に何もする事もない為、オレと哀は博士の家へと向かつていた。

「…コナン、貴方は服部君と何を話していたの？貴方達の事だから、ただの世間話でないと思ってるのだけど」

哀が先程の服部との会話の事を訊いてきた。

「蘭の事だよ。この先どうすんのかって話」

哀は納得して、

「…なるほど、そういう事。確かに、和葉さんの前では言えないわね」



オレは、最後に服部から言われた事を伝えた。

「この先、仮にこの街を出る様な事があつたら、大阪に来ればいいつてさ」

哀は遠くを見て、

「…そうね。将来的にありえない事ではないし、それも選択肢の一つね」

呟いた。

確かにそうなんだが、あまりそういう事態になりたくはねえよな。

「後は、父さんを頼ってアメリカに行くぐれえだな。」

「…まあ、この先の話だし、いざつて時はコナンと言い張るだけだけどな」

哀がオレの言つた事を肯定した上で不備を伝えた。

「言い張るだけでも違つてくるわ。ただ、工藤新一本人だと匂わせる様な会話を聞かれたりしなければ…の話だけど」

博士が一番不安だな。

「それは、注意すべき事だな。でもな、人が10歳も若返るなんて普通は思わねえんだけどなあ」

博士は教えたからともかく、蘭はなんでだか、知んねえけど。

「…それが不思議なのよね。だつて貴方は蘭さんに、何度も疑われたのよね？」

哀も、やはりそう思っているようだ。

その度に、誤魔化してんだけどな…

「…ああ、黒羽に工藤新一の代わりになつて貰つた事もあるし、哀にコナンの代わりをやって貰つたりしたんだけどな」

あれは工藤新一と江戸川コナンが、同一人物じゃないと思わせるには最高のペテンだったよ。

「普通、あそこまでやれば、大概の事は疑われる事はなくなると思つてたんだが…」

哀がオレの言葉を引き継ぐ。

「…それでも、疑われる事があつた」

工藤新一と江戸川コナンが、同時にその場に居たというのにだ…

「…だから、安心出来ねえんだよ」

オレは肩を竦めて、そう言った。

オレ達はその話を終わらせてから暫く無言でいたが、

「で、哀は和葉さんと何話してたんだ？」

チヨットばかり気になんだよ…

「…女同士の秘密よ」

哀はうつすらと頬を赤くして言った。

「…個人的な話か…なら突っ突けないな」

そんな哀を見て、迂闊に訊かない方がいいと判断した。

「…懸命な判断ね」

哀は頬が赤いままで、ホツとした表情で言った。

ゼツテー、色恋沙汰の話だ。

多分、何時好きになったのか？

とか、告白はどっちがしたのか？

とか、何時キスした？

とか、そんな話だろうな…

FILE7：希望と不安の入り交じった将来（後書き）

一応一区切りついた感じですが、次の展開は未だにどうしようか考えてます。

蘭はどうなるんでしょうかね…

未だに引きずった状態なんで、何時立ち直るのか作者にも不明です。何か切っ掛けがあればいいんですけど…

FILE 8 : あれからの月日、夏休みの予定(前書き)

一応の第二部ですかね。

## FILE 8：あれからの月日、夏休みの予定

あれから三年半も経つ、三年半の間は特に大きな事件はなかった。最初の頃は哀との交際宣言で一悶着あったが、今では少年探偵団の奴等と上手くやっている。というか、そもそも騒いだのは歩美と光彦だけで元太は気にもしなかったな。

蘭も見た感じは表面上立ち直ってはいる。あくまでそう見えるだけで、浮いた話がないので確証もない。

大学で知り合った人間や、工藤新一が居なくなった事でモーシヨンをかけ始めた男が何人かいるようだが、付き合いどころまでいいない。

哀は全く変わっていない。身体的にはなく、精神的にだ。

相変わらずクールで冷めたところも健在だ。

それに、オレを愛してくれてるのも変わらない。

：いや、むしろ前より大胆になった。

哀曰く「貴方はこれからモテるだろうから、今の内にわたしのだと周囲に解らせるの」との事。

オレも周りを気にしない方がいいのかな？

哀は絶対に美人になる上に、今でさえ美少女だ。

今でこそクラスメートは気軽にからかってきているが、中学に通うようになれば、異性を意識し始める頃だ。

面倒くせえ事になるし、哀にちよっかいかけようとするガキもいるだろう。

：なんか、考えたらイラつくな。

オレも、「哀はオレの女だ」って事を周囲に解らせる必要があるかもしれないねえな。

「…コナン？眉間に皺寄せて、一体何考え込んでるのよ」  
今は帰宅途中。

哀と二人で歩いていて、深く考え込んでいたオレを哀は呼び覚ました。

「…ん？いや、チヨットな」

哀はオレを心配してか、

「何か心配事でもあるわけ？」

…貴方、途中から怖い顔してたわよ」

考え込んでたオレの顔を指摘する。

「…笑うんじゃないぞ」

ガキっぽい理由だからな。

「よっぽどの事ではない限り、保証するわ」

…まあ、哀なら平気か。

「…いろんな事を考え込んでたんだけどよ。」

…その中で来年になったら、哀にちよっかい出そうとするガキが出てくると思ったら、ムカついただけだ」

…言っちまったぜ。

そう、オレは思ってたんだが、哀は真面目な顔をしていた。

「…笑えないわ。わたしだって同じ事考えたもの」

哀はこちらを見ていない。何処か地面の一点に視線が行っている。

「…哀もか？」

正直、そういう理由で哀も腹が立つ事があるのかと思った位だ。

「…当たり前でしょ。わたしにとってたかが子供でも、やっぱり貴方がチャホヤされてたら…なんて考えるとイラつくもの」

哀は言いながら顔をしかめていく。

「…そんな思いするくらいなら、羞恥心なんて蹴っ飛ばす方がマシね」

しかめっ面のまま、哀は断言した。

「…そうだな」

確かに、その方が心理的に安定するな。

「…でも、哀も変わったよな。付き合う前なら周りの方を気にしてただろ？」

かつての哀の事を示唆する。

「…そうね。それは認めるわ」

哀はしかめっ面を緩めるとオレの問いに答える。

「だろう？」

哀はゆっくりとこちらを向いて、

「…だけど、今のわたしにとって、貴方はわたしのレゾンデーターを構成する一つなのよ」

哀はオレを真直ぐに見据えて、

「…だから、貴方の事に関しては妥協も躊躇もしないわ  
キツパリと断言した。」

「哀ちゃん、コナンくん」

歩美が走ってやってきた。

「…一体、どうしたのよ。そんなに慌てて」

「…ハア、ハア、えーっとね。今度の夏休み、哀ちゃんとコナン君は、どうするかなーって思ってた」

歩美が息を整えながら訊いてきた。

まだ、夏休みまで数日あるんだけどなあ。そんなに急ぐ必要があるのか？

「今度の夏休み？…別に予定はないわよね？」

哀はオレに訊いてきた。

「ああ、確かにねえな。…まあ、どっかに二人で、行きてえなあとは思ってたけど」

答えながら何処が良いだろうつか考えた。

「…そうなんだ。じゃあ、皆で何処かいかない？」

歩美はそれを聞いて、名案とばかりに提案してきた。

「何処かって、何処に行くんだよ」

「ん〜、海とか山とかかな？」

海は哀の水着姿が見れるし、山は山で哀と静かに過ごすのも良いよなあ。

「…そういう場所は、博士の都合が付けば行けるかもしれないわね」  
「…か、皆で行くとなると、博士が居ねえんじや行けねえよ。」

「…そっかー、じゃあ博士にお願いしとかないと」  
歩美はオレ達と一緒に、博士の家まで付いてきた。  
てか、今日頼むのかよ…

「…ただいま」

「お邪魔しまーす」

哀に続いて歩美が玄関から入る。

「おかえり哀君、歩美君もよくきたのう」

博士は玄関のすぐ側に居たようだ。

「お邪魔してるぜ。博士」

オレもその後博士の家に入る。

「おお、コナンも来ておつたか」

つて、いつも哀と一緒に来てる事、知ってるじゃねえか。

たまに、来ねえ日もあるけどよ。

「で、今日は何かあつたかのう？」

博士は歩美がいたので、訊いてきた。

「歩美、今日博士にお願いがあつて来たの」

「なんじや、ワシに用があつたのか。ワシに出来る事なら構わんよ」  
自分に用があるとは思ってなかった様だ。

今日はなんでもない日だし。ただ、哀と遊びたかっただけとしか、  
思わねえもんな。

「今度の夏休み、皆と何処かに行きたいんだけど…」

歩美は言葉を詰まらせるが、

「…ふむ、つまりワシに保護者として、付いてきて欲しいという事  
じゃな」

博士は歩美の意を汲んで、答えを言う。

「うん」

博士は少し考えてから。



「まあ、日程が決まつとるなら、空ければよいだけじゃが。日程は決まっておるのか」

博士に訊かれたが、

「いんや、全然」

そう答える事しかできない。

なんせ、今日突然決まつた事だし。

「…取り敢えず、何処かに行こうとまでしか決まっていな。それに他の二人はまだこの事知らないし」

哀が詳しく博士に説明する。

「ふーむ、それではどうしようもないのう。光彦君や元太君とも、

相談した方がよいと思うぞ」

アイツらなら、何処に行きたがんだらうな。

元太なら…美味いメシがある所つて、言いそつだ。

光彦は…わかんねえな。

「…そうですね」

歩美は落ち込んだ返事をした。

「もし、決まらなければ、ワシの方で決めてもよいがの。

…まあ、五人でよく話し合つて決めなさい」

博士はそう締め括つた。

「はい」

歩美もそれ以上落ち込むのはやめたようだ。

オレ達はリビングに集まつて話し合つていた。他の二人がいないが、取り敢えずオレと哀の意見を訊いておきたいらしい。

博士は用事があるらしく出掛けて行つた。

というよりも、出ようとした時にオレ達が来たんだよな。

「でね、何か意見はある？」

歩美が訊いてくるが、

「…オレは何処でも構わねえよ。日時もな」

哀と一緒になら、別に何処でもいいし。

「…わたしは人込みが多くなければ、それでいいわ」

哀は喧騒のあるような所は、出来るだけ避けたいらしい。

「コナン君はなんでもよくて、哀ちゃんは…山の方かな。海だと人多そうだし」

歩美はオレ達の意見を確認して、まとめてみた。

「…そうね。そうして貰えると助かるわ」

哀は山で良いらしい。

後は他の二人だけか…

…と、考えていたその時。

「じゃあ、山でいいよね？」

歩美は勝手に決めてしまった。

おいおい、アイツらはいいいのかよ。

哀の方を見ると、哀も同じ思いのようだ。

「…あれ？どうしたの二人共」

歩美は、何故オレ達が何も言えないのか分かってないようだ。

「…他の二人に、訊かなくていいのかしら？」

…勝手に決めてしまって」

哀が、恐る恐る訊いてみた。

確かに。アイツら、絶対抗議するぞ。

「…元太君と光彦君？…別にいいんじゃない？」

歩美は、どうでもいいといった感じで言った。

…うわあ、アイツらが可哀相に思えてくるぜ。

「…だって、哀ちゃんは山で、コナン君も山で、わたしも山だもん。

二人に訊く必要ないと思うけど」

歩美はキョトンとした顔をして、理由を述べる。

「…はっ？」

一体、何時、オレが山になったんだ？

哀も歩美を見て「何故？」って顔をしていた。

「哀ちゃんが山だもん。コナン君はどうせ哀ちゃんと同じでしょ？」

… まあ、哀が山が良いのなら、オレは断然、山になるんだろうけどよ。

「歩美はどっちでも良かったんだけど、哀ちゃんに無理させたくないから山にしただけかな」

… そうだけの理由かよ。

… まあ、オレも大して変わらねえけど。

… 結果、哀の希望通りである山に決定した。

… アイツらの意見を訊かずに。

取り敢えずは、一応アイツらの意見を訊くだけはするよう歩美を説得するのはなかなか骨が折れた。

… そんな時のオレと哀は、随分と必死だった事だろうな…

## FILE 8：あれからの月日、夏休みの予定（後書き）

第二部開始という感じで始まりました。

今回、ようやく阿笠博士も初登場です。今迄、阿笠邸での話も有ったに出せなかったのは、単に作者の力量不足です。登場人物を最低限にしないと、こんがらがってくるんですよ。

小五郎なんかがいい例ですね。たった少しのちよい役になってしまふ可能性が大いに有り得るので…

多分、少年探偵団と博士の組み合わせなら、なんとかなるんじゃないかなと思ってます。

原作でも、この組み合わせは多いので、会話等が想像しやすいと…

今後の予定

コナンと哀は三年半の交際期間を経て、精神的に多少変化しています。バカップル状態が加速したとも言おう。

蘭は、流石に立ち直らせねば拙いですね。蘭は、もう大学四年期生になってますし。

少年探偵団の面々、どうしたら良いのか検討中？

平次と和葉、再登場の機会を何時与えるか…

他の面々、出てきてない人物は五年半の間、どう変化しているのか、考えた方がいいのでしょうかね…

FILE9：小学生としての最後の夏休み

前編（前書き）

単なる夏休みイベントその1

あれから終業式が終わって数日が経ち、今日は少年探偵団の奴等と山にキャンプしに来た。元太と光彦は海か山かで意見が割れたが、歩美が山だと言うと、アツサリ意見を翻してスムーズに山に行く事になったんだ。

「さて、これからキャンプの準備の為に、テントの設営になるのじやが…」

目的地に着いてから、博士が先ずやるべき事を提示した。

「…二人一組で一つのテントを使うんだろ？」

オレは博士の言葉を遮って、先に答える。

「うむ、三つしかテントがないからの」

博士は肯定する。

…出来りや、哀と一緒にテントが良いんだけどな。

「…コナン、先に言って置くが哀君と同じテントにはならんぞ」

博士は、オレに対してクギを刺してきた。

「わぁーってるよ。残念だけどな」

…組み合わせは、オレと博士、元太と光彦、哀と歩美に別れる事になった。

「オレ、テントの組み立てするぜ」

元太が組み立てに名乗りを上げる。

「僕もやりますよ」

光彦も上げている。

コイツらは二人でやらせた方が無難だな。

「オレは哀の使う方のテントを組み立てっから、博士はもう一つのテントを組み立ててくれ」

オレは哀の使う方のテントを組み立てる事にした。

哀はともかく歩美だと不安だし、何より哀に力仕事はやらせたくない。

「うむ、怪我をせんように気を付けるんじゃぞ」

博士の注意を合図にして、オレ達は準備を開始した。

「…じゃあ、わたし達はその間にお昼の準備を済ませてしまいまし  
よう」

哀は歩美に昼の準備を示唆して、器具等を引っ張りだし始めた。

「うん」

歩美も哀に続いて、哀の引っ張りだした器具等を細く整理し始めた。

テントの設営は順調に進んだ。

…過去に何回かやってるしな、特に問題らしい問題は無かった。

哀達の方も器具等を出し終わって、食材の下準備の段階に入っていた。  
た。

オレ達の次の仕事である薪拾いも順調に進み、戻ってきた時には下  
準備の方も終わっていた。

「あら、コナンの方はもう終わったの？」

哀は薪を持ったオレを見つけて、話し掛けてきた。

「ああ、あらかたな。そっちも下準備は終わってるみてえだな」

オレは薪を置いて哀の手元を見てみると、串に刺さった食材が見え  
た。

「ええ、単に手頃な大きさに切って串に刺すだけで済むもの」

昼はバーベキュー、キャンプの定番だな。

「おいコナン、飯はもう出来るのか？」

もう待ちきれないらしく、元太は腹に手を当てて訊いてくる。

おいおい、少しは我慢してくれよ。

…本当にこういうところは変わってねえな。

「…下準備は完了してっから、後は焼くだけだよ」

そっぴや、光彦は何やってんだ？

回りを見渡すと案外近くに居た。

…歩美と何か話してるみてえだな。

「ホントか！？じゃあ、早く焼こうぜ」

それを聞いて、喜々として哀を急かす元太。

「はいはい、今から焼くから待ってなさい」

哀は元太に対し、子供を窘めるように言いながら、手元で焼く作業を始める。

「…オマエって科学者だけじゃなく、主婦にも直ぐになれそうだな」  
思わず口に出してしまう。

「…それなら、貴方が旦那様ってところかしら？」

哀はそのまま切り返してきた。

「…将来的にはそうだろうな」

高校出る頃には、考えねえとな。

「…そう、早くそうなりたいわね」

今の哀は直球だな。

…以前の哀じゃ、本当に考えられねえけど。

「…そうだな」

結婚するまで後、六年も必要なんだよな。今まで付き合い始めてから三年半経ってるから、そんなときは十年目になるのか…

「…お前らそれ、プロポーズか？」

…あー、そういや元太が居たんだったな。

哀の方もバツの悪い顔をしていた。

そんな風に時間が過ぎ、焼き上がった場合に全員で昼食を摂ることになった。

「貴方は食べないの？」

オレは少し離れた所に居たが、そんなオレを見て哀が話し掛けてきた。

「…アレ見て、食べる状況か？」

見ると元太は両手に串を持ち、次々と食っている。肉が中心なのは、ご愛嬌だな。

光彦はそんな元太を窘めながら、食っている。



歩美は元太と光彦が、食う事しかしてないので、串を網に置きつつ食っていた。

博士は串を置いたり、焼き上がりに注意している為、少ししか食ってない。

「…確かにね。ハイ、コレ」

哀は両手に焼き上がっている串を持っていて、片方をオレに差し出した。

「…ああ、悪りいな」

哀から受け取り、一口食べる。

「…美味しいな」

焼き上がったばかりのそれは、下味もよくしてあり美味かった。

「…それはよかったわ」

そう言いながらオレの隣りに座り、哀も食べ始めた。

オレは、騒ぎの方を見て、アイツら全部食っちゃうんじゃないだろうかと心配してしまう。

「…取り敢えず、あの子達の食べる分と、わたし達の分は分けてあるから、無くなる心配はないわよ」

オレの考えを読んだのか、哀がオレ達の分は取ってあると言う。

「…そうか、アレ見て博士が可哀相に思えるし、オレ達が食えなくなるのも辛いなあと思っちゃったぜ」

オレ達は元太達が食い終わってから、食べ始めた。食い終わった元太達は、今は何処かを散策している。

「…しかし、あの子らも、よく食べてたのう」

博士が感嘆の意で言う。

「…博士、殆どありつけなかったもんな」

傍から見ている哀愁漂ってたもんな。

「…仕方あるまい。子供達よりがつついて、食べる訳にはいかないじゃろ」

「…でもよ、あの状況の中で食おうとする博士も凄いのと思うぜ」  
焼き上がった串を取り、一口食ってオレは思った。  
あんなに混じって食うなんて出来ねえよ。

「…そうね。だから、わたし達は離れて見ていた訳だけど」  
哀も同感らしい。

まあ、その間哀と二人でいられた訳だし、オレとしては悪くなかった。

「その間、新一も哀君も、何も口にしていなかったからの」

「…オレ達は、一本ずつだけど食ったぜ」

そっぴや、博士はアイツらの面倒見てて、コッチの事は知らなかったな。

「何？いつの間に食べとったんじゃ」

博士は不思議そうな顔して訊いてきた。

「哀が持つてきてくれたんだよ」

あの、一本があつて本当に良かったよ。

「コナンが何も口にしてなかったから、持つていったのよ。事前に二本だけ焼いておいたから、確保しておいたの」

哀が嬉しい事を言ってくれる。

流石に、抜け目ねえぜ。

「ふむ、…できればワシの分も確保してもらいたかったのう」

博士は残念そうに言う。

…博士、少なくともオレ達よりは食ってたじゃないか。

「ごめんなさい博士、コナンの事しか考えてなかったのよ」

哀も厳しいな。オレは嬉しいけど、博士にはキツイ一言だな。

「…むう、やはり恋人がいる子は親から離れていくんじやろうか…」  
博士の年齢考えりや、子つて言うより孫だろ。

食べ終わった後は、軽く片付けて、各々自由行動する事になった。

哀と一緒に辺りを散策したり、途中元太達と会って釣りをしたりして時間は過ぎていった。

夕方になって、オレ達は暗くなり始める前に、夕飯の準備をする事にした。

ちなみに夕飯は、キャンプの定番であるカレーライスだ。

「コナンはお米を研いで、小嶋君は飯盒の準備をして、円谷君は歩美ちゃんを手伝って」哀が指示を飛ばす。オレは米を研ぐ準備をしながら、なかなか堂に入っているなと感心していた。

その後、それらをこなした男連中は特に何もする事はなく。

夕飯が出来るまでの間、唯ひたすら火に掛けた飯盒を、見つめて待つ事しか出来なかった。

FILE 9：小学生としての最後の夏休み 前編（後書き）

単なる夏休みのイベントって、わたしには書くのが大変な事が判明。事件等は起こりません。

…というよりはわたしには書けないだけなんです。取り敢えず次は後編の予定です。

FILE10：小学生としての最後の夏休み 後編（前書き）

今回の話は、少年探偵団の中での色恋沙汰の雑談みたいな話です。

FILE 10：小学生としての最後の夏休み 後編

夕飯を済ませた後、オレ達は皆で、来年の事について話していた。

「来年はいよいよ中学生になるんですよね」

光彦のこの一言が契機だった。

「…そうね」

哀はどうでもいいといった感じで返事をした。

「なんだあ？灰原は嬉しくねーのかよ？」

元太は哀の態度に訝しさを感じたようである。

オレは、哀が何故そんな態度を示すのか、理由が理解できた。

「…別にそういう訳じゃないのよ」

哀は、中学生になる事に対しては問題にしていない。

「じゃあ、なんで？」

歩美は疑問を投げ掛けた。

「単に面倒な事が増えるのが億劫なだけよ」

…哀が言った通りに、中学生になった後の環境が嫌なのだ。

「コナン君はどうなんですか？」

光彦は黙って聞いているままのオレに、違和感を感じたのか、同じ意味の意図で訊いてきた。

「…オレ？…オレもかったりーと思ってるぜ」

哀と同様に淡々と答える。

先の事を考えると本当に億劫になるよな…

「おいおい、コナンも灰原も、なんでそんなに冷めてんだよ！」

「そうだよ！中学生になれば、新しい友達出来るかも知れないよ？」

元太や歩美が、オレ達の態度に不満を感じるのか、抗議やプラス面を語り出す。

…オレは一回中学生をやったつから、オマエらみてえに希望的になれねえんだよ。

哀は、どうだかわからねえけどな。

哀がアメリカに留学していたのは知っている。

向こうのジュニアスクールと、こちらの中学校が全く同じ雰囲気かは知らないし、そもそも通っていたのか？

…通っていたとしても当時、どちらに通っていたのか、哀から訊いていないので細かい事は分からないし、敢えて過去を聞き出す必要はないだろう。

「その新しいダチ以上に、面倒くせーヤツラの方が多そうだからだよ」

オレは心底本音で言った。

哀にちよっかいを掛けるガキとか、男とか、ガキとか、男とか、ガキとか、男とか、

…って、考えたらムカついてきたぜ。

…恐らく、自分は今、不機嫌な顔をしているだろう。

「…なるほど、何故コナン君達がそんな態度なのか解りましたよ」

光彦は全ての謎が解けたかのように語りだす。

「おい、それってなんなんだよ？」

「そうだよ。早く教えてよ」

光彦が何を言っているか解らない元太と歩美が、光彦に迫り寄る。

おいおい、一応オマエら少年探偵団なんだろう？

光彦に訊く前に、チョットは考えたらどうなんだ…

オレは思わず溜息をついていた。

「…お二人とも、構いませんか？」

訊きにくる辺り、光彦は、確実に理由が解っているだろう。

「…別に構わねえよ。…多分、光彦の考えてる通りだと思うけど？」

「…そうね。わたしも構わないわ」

別に、オレ達に不利益があるわけじゃねえしな。

光彦はそれを聞き、一拍置いてから喋り始めた。

「…現在、コナン君達が付き合っている事は、僕らやクラスメート

の人達全員が知っている事ですよね」

それを聞いた二人は、別々の反応をした。

「それがどうしたんだよ」

「…あつ！…そういうことなんだ！」

元太はまだ解らねえみてえだが、歩美は理解したようだ。

…やっぱ、色恋沙汰を気にしているからか理解が早い。

光彦が先ず最初に気付いたしな。

「歩美ちゃんの考えている通りです。コナン君も灰原さんも、お互いに自分の恋人に近寄ってくる人達が嫌なんですよ」

光彦がそういうと、やはり別々な反応が返ってくる。

「…ふーん」

元太はようやく答えを得たが、理解はまだしていないようだ。

「確かにコナン君はカッコいいし、哀ちゃんだって可愛いもん。

…心配してもおかしくないもんね」

歩美の言った事は、ほぼ正解だった。

…だが、一つだけ違うところがある。

「…いえ、心配はしていないわ」

哀がここで口を挟んだ。

「…えっ？なんで？」

歩美は困惑したのか、戸惑いながらも疑問をぶつける。

「…コナンの事は信頼しているもの」

ここで一拍を置く哀。

「…彼を盗られる心配は必要ないの。単に彼にちよっかいを掛けるモノに対して、苛立ちを押さえ切れないだけよ」

哀の言った通りだ。単に、中坊相手に盗られる心配をする必要はない。

オレ達の場合は、単に小さくなっているだけで、中身が同年代だから付き合っている訳だ。

哀の年齢が、外見同様の小学生だったら付き合っていたか？と思うと、少なからず疑問を感じるだろう。



まあ、仮に哀が正真正銘の小学生だったとしても、現在は構わない  
気もするが…

…だが、そんな事は分かっているもムカつくのだ。

「…そうなんだ。…コナン君もなの？」

哀の言った事に納得した歩美はオレにも訊いてきた。

「…ああ、分かっているもムカつくな。哀の事を何も知らねえ癖に、  
外見だけでちよっかい掛けてくるようなガキは特にな」

苛立ちが表に出ていたせいも、思わず素で答えていた。

「…ガキって、コナン君もそうじゃないですか」

光彦は苦笑しながら、言い返す。

「そつだぞ！コナン」

元太はムキになって言い返してきた。

元太は年相応の反応を返してきたが、光彦は違っていた。

… 案外光彦のヤツ、オレ達の事、薄々感づいてんじやねえだろうな？

もしかしたら、光彦はこのおよそ五年間の間で、オレ達に対して疑  
問を持った可能性がある。

… 少なくとも外見同様の小学生とは思っていないだろう。先程の苦  
笑混じりの反応が、それを証明している。五年前なら、元太と同じ  
様な反応をした筈だしな。

その後、皆が寝静まった頃。

オレと哀はテントから抜け出し、近くの丘に座った。

「…なあ、哀」

オレは哀に話し掛けた。

「…なに？」

哀は軽く返事をした。

「さっきの話での光彦の反応。

…もしかしてオレ達の事、アイツ感づいてんじやねえよな？」

先程の事での疑問を、哀に訊いてみた。

「…そういえば、あの反応は違和感があったわね」

哀は先程の会話を思い出ししていたのだろう。

「だろう？」

「…でも、少なくともわたし達が、本来が大人であるという事実は気付いていないと思うわ。」

「…タダ者ではないとは思っているでしょうけど」

哀も同じ様に考えているか…

「…それよりも、先の事を考えてしまっわね」

哀はアイツらに正体を感じづかれる事よりも、別の事を懸念しているようだ。

「…蘭の事か？」

…思い当たる節を述べる。

「…ええ、そろそろ疑惑を感じ始めてもおかしくないわ」

哀は肯定し、理由を答えた。

…確かに、大学を出て探偵事務所に戻ってくる可能性もあるしな。

「…まあ、中学生になったら探偵事務所をでるさ。いい頃合だしな」  
組織が存在しない今は、あそこに居座り続ける必要はない。

「…それで、どうするの？」

哀はその後、どうするのか訊いてきた。

「オレン家に戻るさ。そんなときは父さんに話を通しとけば平気だよ。」

…それに今更、博士ん家に厄介になるには、逆に不自然になるだろうしな」

…探偵事務所に厄介になつたオレが、博士の所で厄介になるなら最初からそうしていた筈だと思っだろう。

「…それに、哀と一緒に居られる時間も増えるしな」

…これは、オレにとって嬉しい事でもある。

「…もう、何言ってるのよ」

哀は恐らく顔を赤くしているのだろう。

薄暗くて判りにくいのが、恥かしがっている事は解る。

「…恥かしがんなよ。愛してんだから、当然の事言ってるだけだろうが」

オレは哀を抱き寄せて、耳元で言う。

「…はいはい、わかっているわよ」

哀は、オレに抱き締められたままで言葉を返してきて、

「…それと、もう少し貴方はその齒に衣を着せない物言いを改めた方がいいんじゃない？」

突然そんな事を言ってきた。

「…あ？なんでだ？」

「…一体どういう意味だ？」

「…気にしなくていいわ」

オレに言っても無駄だと思ったのか、哀は無理矢理話を終わらせた。

「…まあ、いいか。気にしなくていいと言ってるんだ。」

その後は、そのまま抱き合って世間話をしたり、雰囲気の流れでキスをしたりとイチャついていたオレ達の夜は、誰にも邪魔されないまま過ぎていった。

## FILE 10：小学生としての最後の夏休み

後編（後書き）

光彦はコナン達の正体に気づいているのか？

そんなフラグを立ててみました。

前話に置いても光歩フラグが立っていきそうな、ないような…

取り敢えず今回の更新を切っ掛けに、一度更新を休止します。

忙しくなり、更新ペースが維持出来ない事もありますが、蘭を立ち直らせる話の構想をジツクリ練ってみたいのが本音です。

少なくとも一カ月以内には再開すると思いますので、その時にはどうぞよろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2152c/>

---

君の傍にいる

2010年10月10日16時27分発行